

氏名(本籍)	おか 岡	よし 順	ひろ 寛(東京都)
学位の種類	博士(文学)		
学位記番号	博乙第1589号		
学位授与年月日	平成12年3月24日		
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当		
審査研究科	文芸・言語研究科		
学位論文題目	ド・マン／ブルーム／デリダ ―文学理論と究極の決定―		
主査	筑波大学教授		森田 孟
副査	筑波大学教授	博士(法学)	荒木 正純
副査	筑波大学教授		井上 修一
副査	筑波大学助教授	文学博士	鷲津 浩子

論文の内容の要旨

本論文は、1970年代前半から1990年代初期までの約20年間に及ぶ、＜ポスト構造主義＞から＜新歴史主義＞にいたる欧米の文学批評・理論の実態を究明し、その展望を開こうとした壮大な試みである。

著者はそれを、カント、ヘーデル、フッサール、ハイデガー、フーコー、ブーレ、バルト、ラカン、あるいはリオタールやイーグルトン等の知の群像を目配りよく概観することから始めて、主要な批評家として、ポール・ド・マン、ハロルド・ブルーム、ジャック・デリダの三者を中核に選び、彼らが目指す＜心理＞と＜主題＞の「究極」に次の四点、すなわち、①＜デコンストラクション＞の「デ＝コンストラクション」、②「読み論」「書記論」、③＜キャンノン〔規範／正典〕＞の再構成、④＜批評の究極＞＜新しい法の在り処＞、の四つの切り口から迫ってゆく。

彼らはそれぞれ、独自の発想から独自の批評理論の用語を創案し造語して、独自の方法を編み出しながら対象に取り組んで新しい地平を切り開いたが、それを個々に、彼らの周辺の先行の見解と照らしながら点検する。そして、強力な影響力を揮った＜デコンストラクション＞批評が、アメリカ文学批評を国際舞台に躍進させ、世界規模にするのに貢献し、修正マルクス主義批評家の＜新歴史主義＞を誘発し、文学研究と教育に歴史・心理学・政治学・社会学・経済学、その他の原理を取り入れた幅広い＜文化研究＞の隆盛を生む契機になった有り様を跡づけている。

本論文の構成は、次のとおりである。

前書き

- I ポスト・モダニズム／ポスト構造主義の遺産
- II デコンストラクションのデ・コンストラクション
- III デコンストラクション批評と読み論／書記論
- IV ＜キャンノン＞の再構成／批評の究極の決定
- V 批評のエニグマ／新しい法のありか
- VI 文学研究の文化研究への傾斜／ニューヒストリシズム

著者注

ビブリオグラフィー

後書き

Iは、＜デコンストラクション＞出現にいたるまでの解釈学・言語学・美学、及び読み論／書記論を、それぞれの問題点を剔抉しながら吟味する。例えば、ハイデガーの“Destruktion”と“Abbau”を、フーコーの知の政治学に見られる真理と権力の姿を、リオタールとイーグルトンの立場からマルクス主義批評の見取り図を、というように検討する。

IIは、1970年代後半に華麗に展開された＜デコンストラクション＞批評が、1980年代に入ってからブルームとデリダがそれぞれ新しい概念である“revisionism”と“disschemination”を提起したことで見せた新たな展開を検討する。最後に、ポール・ド・マンが、第二次大戦中に親ナチスの文書を発表していたことが発覚して起こった「ド・マン醜聞」の実態とその意義を詳説する。

IIIは、「読み／書記」の戦術と実践方法の実態を凝視するにあたって、＜現実を超越する＞トドロフと＜過去を書き直す＞カーモードの視点を導入し、ド・マンは＜仮想の焦点＞の開示／真理のデコンストラクションであり、ブルームは詩を＜反読＞のトポス／自分の名＝＜ものを言う主題＞だと捉えたのだと見、デリダは＜超越的シニフィエ＞の記号化／＜神聖性＞という＜主題＞の回復を企てたと見なす。

IVは、この三者が目指す批評の＜キャンノン再構成＞と最終的な＜目標の決定＞の有り様に視点を据えて、この問題を総括する。＜考える主題＞のアレゴリーは、＜記号＞に対する＜思考＞の優先性を示すのであり、＜詩的なもの＞の声化作用の中心はグノーシス（靈知）とサイキ（靈氣）であり、＜翻訳不可能なもの＞の翻訳は批評家の＜欲望＞であり、それが＜法の法＞なのだ、とする。

Vは、1990年代に入ってから＜デコンストラクション＞批評は「ド・マン醜聞」論争を経て批判攻撃にさらされるようになり、この批評の存立が問われ、その崩壊が論議されるようになるが、その実態を検討しながら、ド・マン裁きの正当性の問い直しを行い、ブルーム及びデリダの実践の新たな展開の成功度を吟味する。

VIは、1980年代後半から1990年代にかけて＜デコンストラクション＞批評の傍系として、及びその延長線上に現れた二つの文学批評理論の＜新歴史主義＞と＜文化研究＞を検討し、その可能性と限界を探る。

審査の結果の要旨

本論文は、1990年代初期までの約20年間の欧米の最新の文学批評・理論を、特にポール・ド・マン、ハロルド・ブルーム、及びジャック・デリダを中心に、その実態を吟味したもので、彼らのテキストは勿論、その周辺及び前後の他の多くの批評家の膨大な量のテキストそのものを、著者独自の眼で読み解き点検した精力と粘り強さは、特筆に値する。夙にブルームの筆書の一冊を翻訳していたこの著者が、イエール大学、ケンブリッジ大学での客員研究員の日にブルームを始めとする多くの第一線の批評家の警咳に接して、その批評と理論及びその受容の実態を目の当たりにしたのが、本論文執筆の直接の動機というが、その直かの親昵ぶりは論述によく反映している。唯、その文章が、相当に難解である。

何しろ、本論文が扱う当のテキストそのものに、新しい地平を切り開く著者たちは必然とも言えることながら独自のそれぞれの造語を駆使した複雑難解なものが多いので、それを安易に噛み砕いて図式化することで浅薄な把握に墮する危険を避けて実態を浮上させようとするれば、その論述がある程度難解になるのはやむを得ないであろう。

この著者は、これまでに日本語と英語の両語で何冊も詩集を公刊している詩人でもあり、その面目は、例えば「後書き」で、ド・マンを「文学全体と自分に＜裁き＞の剣をつらぬいた報復の＜デコンストラクション＞の王」、ブルームを「グノーシスの後来者としての先行者の始源創造の祭を再生産した＜リヴィジョニズム＞の祭司」、デ

リダを「プラトンとフッサールを読み越し、語り越して、思考の全能的な可能性に遊ぶ〈ディシユミナシオン〉のプリンス」と、比喩で捉える辺りにもよく窺える。その詩人氣質が、著者をして、本論文の対象とした批評家たちの「詩人」の部分によく肉薄することを可能にさせた反面、前述のような文章の難解さに繋がっているとも考えられる。

本論文は、「脱構築」という訳語が一般に定着している〈デコンストラクション〉を、敢えて「逆構築」と訳して把握することを始めとする「独自さ」に、独自さの有する示唆力と共に些か強引さが見られなくもないが、それが、もう少し分かりやすい表現がとれなかったものかという難解さと共に、欠点といえば欠点であろう。しかし、「美と詩が存続する限り理論と批評が減びることはないはず」（「後書き」）と信ずる詩人・研究者が、今後の文学研究・理論構築の一助にと願って提出した現代の欧米の「文学理論・批評思想のエッセンス」（同）は、本論文のような形では従来見られなかった斬新なものと言ってよく、「ド・マン醜聞」を批評という名の知の〈超換闘争〉の一環だったと位置づけるなどの多くの正当な見解及び、特にブルーム論の充実さ共々、学界に寄与するところ大と認められる。よって本論文は、学位論文として十分に価値あるものと判断する。

よって、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。